

9/4.3.22

米國製兵器 維持費が高騰

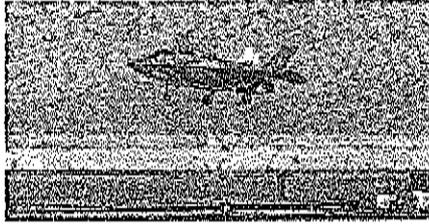
F35A・B戦闘機、合計7.9兆円

兵器類のライフサイクルコスト(LCC)、**額**が上昇傾向にある

■米國製兵器のLCC(※)総額の推移、()内は取得数

	2021年	2023年
F35A戦闘機 (105)	39261	48508
F35B (42)	23460	30352
E2D早期警戒機 (18)	10289	17331
KC46A空中給油機 (15)	8785	14710
グローバルホーク (無人機、3)	3253	4049

※LCC=ライフサイクルコスト。導入費・維持費・廃棄費用の総額
単位：億円、防衛装備庁資料から作成



米軍岩國基地(山口県岩國市)で垂直着陸するF35Bステルス戦闘機。防衛省は2024年度から空自新田原(たもつたはる)基地への配備を狙っている

り、とりわけ米國製兵器で高騰していることが、防衛装備庁が8月31日付で公表した装備品管理に関する年次報告書で浮かび上がりました。

際立っているのが、「史上最も高価な兵器システム」と言われるF35A、Bステルス戦闘機です。2021年時点で、運用期間を30年と想定し、Aを3兆9261億円、Bを2兆3460億円と見積もっていました。ところが今年の報告書で

は、Aが4兆8508億円、Bが3兆3522億円と大幅に上昇。A、Bの合計で約7.9兆円に達しています。(表)

内訳をみると、機体そのものの価格に加え、燃料費や部品調達、改修費など全般的に高騰しています。燃料費をめぐっては国際的な原油価格の高騰のあおりを受けた形になっています。

部品調達や改修は、高性能化に伴う単価の高騰などが考えられます。

KC46A空中給油機、無人偵察機グローバルホーク、E2D早期警戒機といった米國製兵器も軒並みLCCが高騰しています。米國では兵器の高性能化に伴い、導入費や維持費が高騰し、「持っているだけ」で莫大(ばくだい)な費用がかかる状況が相次いで報告されています。とりわけ、F35をめぐり、米政府監査院(GAO)は2021年3月の報告書で、維持費は今後も増え続けると警告。これらは現在だけでなく、将来の納税者にまで重い負担をおしつけるものです。

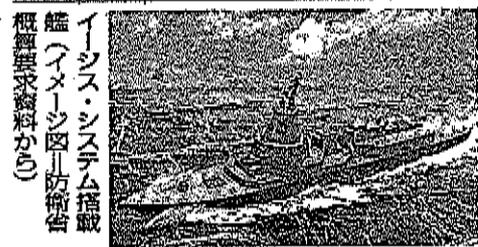
イージス搭載艦2隻 8000億円

当初計画の3倍超に膨張

防衛省は2024年度予算概算要求で、「イージス・システム搭載艦」2隻分の建造費を計7900億円と初めて公表しました。2年前に想定していた約5000億円から約1.6倍、出発点である陸上配備型迎撃ミサイルシステム「イージス・アショア」(陸上

イージスの導入経費と比べると、3倍以上に膨張。安倍政権時の米国防務省が「米国防費の増大」をめぐって、防衛省は本紙の取材に、内訳を▽米軍艦大手ロッキード・マーチン社製のレーダー「SPY7」やイージス・システム、発射装置な

どの取得費約4100億円▽船体の建造費約3800億円と説明。1隻あたりの建造費は約5500億円と、海面が保有する艦船で最も高額な「まや」型イージス艦の約1680億円と比べて2.3倍にもなります。イージス搭載艦は、秋田、山口両県への配



イージス・システム搭載艦「イージスアショア」防衛省概算要求資料より

備を狙っていたものの、住民の反対や技術的な問題で2019年に破綻した陸上イージスの代替措置です。本来なら、計画を全面撤回すべきでしたが、当時の安倍政権は対米関係を考慮し、「イージス・アショア」に搭載するSPY7レーダーの延命に固執。延命策としてイージス艦への

搭載を計画しました。防衛省は19年当時、住民説明会で、陸上イージスは1隻あたり約1200億円、建設費や維持管理費を含めたライフサイクルコストは、約43889億円と説明していました。一方、イージス・システム搭載艦について防衛省は21年当時、1隻あたり約2500億円と想定。さらに、SPY7の洋上仕様への改修や、イージス艦の大型化など、費用は雪だるま式に膨らんでいきました。

建造費に加え、維持管理費(30年間)はイージス艦の場合でも1隻1500億円程度かかります。これを含めると、総額1兆円を超えるのは確実です。ミサイル発射試験場の建設費などもかさみ、まさに青天井です。

イージス搭載艦には、敵基地攻撃能力に使える米国製の長距離巡航ミサイル「トマホーク」や「12式地对艦誘導弾能力向上型」、極超音速兵器(HQ

V)迎撃ミサイルの搭載と敵基地攻撃を一体「統合防空ミサイル防衛」の一環を担います。